



題名「好きな活動やおもちゃ！」

♡作品解説♡

教室の子どもたちみんなで好きなものをたくさん考えました。おもちゃや活動などの名前がたくさん上がり、みんなの好きが詰まったフラッグになりました。(スマートキッズプラス平井)

「インフルエンザなど感染症流行期の予防と通院の工夫」

北川医院院長 猪狩和子 × 所長 中村雅子

中村:昨年(2023年3月23日)、本研究所では、世界自閉症啓発デーに先立ち、「オンライン啓発イベント(講演会)」と「子どもたちの絵画展」を開催しました。その際、猪狩和子先生には、「子どもたちの幸せを願って～だれもが自分のよさを生かし合える楽しい社会づくり」というタイトルでご講演いただきました。

猪狩:この年のスマートキッズのコンセプトは、「みて！きいて！自閉症・発達障害の素晴らしい社会」でした。自閉症をはじめ発達障害のある子どもたちが、安心して暮らせる社会をつくろうという思いで、みんなが一つになりました。数々のイベントをきっかけとして、障害のある子どもたちへの理解も少しずつ進んでいるように思います。

中村:そうですね。子どもたちが社会に参加していくきっかけづくりは大切ですね。子どもたちが創り上げた素晴らしい作品が、松浦さんや猪狩先生のお力添えもあり「池袋サンシャインシティ」に展示され、同時に「としまテレビ」で中継していただいたり、「きらっと」の題字に掲載したりして、多くの皆様に子どもたちの活躍を知っていただくことができました。また、作品づくりのプロセスでも大事な点がありました。スマートキッズ放課後等デイサービスの各教室では、指導員さんたちが、子どもたちの描きたいものを出し合いながら、子どもたち同士で、折り合いをつけ、題材を決めていったそうです。例えば、浅草の浅草寺など住んでいる地域の題材を表わしたり、地域を走るバスや電車などを表現したりしていました。こうした話し合いを通して、折り合いをつける力を、放課後の生活の中で身に付けていくことは素晴らしいですね。

猪狩先生のご講演は、子どもを病院に連れて行くのに苦労されている保護者の皆様にとって、とても参考になったという感想をいただきました。音や匂いに敏感であったり、治療器具が触れるのを極度に怖く感じたり、予想できない不安を抱くお子さんにとって、病院は苦手なことが多いですね。

インフルエンザなど様々な感染症が流行するこの時期、どうやって病院に連れて行こうかと悩まれる方々も多いと思います。改めて、感染症流行期の予防や通院の工夫について、教えていただければと思います。

猪狩:私が「きらっと」を担当する時期は毎年2月です。この時期は、感染症対策として、換気やこまめな手洗い、ソーシャルディスタンスなどが重要です。詳しくは、「きらっと25号」(2022年2月1日)に、また、病院ざらいをなくす工夫については、「きらっと36号」(2023年2月1日)の各号に詳しく書いてあり、ホームページから検索できますので併せてお読みください。

新型コロナウイルス感染症も感染者数や重症例も減少して、ようやく平穏な日常生活がもどってきました。子どもたちも落ち着きを増していますが、診察時の緊張感は同じようです。白っぽい壁、独特の薬の匂いや見慣れない機械の数々、白い服を着た医師や看護師さんなど、日常と違う雰囲気子どもは敏感に察知して、何か痛い事や怖い事をされるのではないかと急に怖くなって泣き出すことはよくあります。子どもはだれでも、実は大人でさえ病院は苦手なところなので、環境の変化に敏感なお子さんが、病院嫌いなのは、当たり前だと思います。今まで味わったことがない恐怖感を感じ、拒絶反応が強く興奮状態になるお子さんもいます。病院の環境に慣れるのにある程度の時間が必要なのでしょう。まれに病院大好きなお子さんもいて、鼻閉、鼻汁がひどい時に耳鼻科で

治療して爽快になったのを覚えていて、自分から大好きな耳鼻科で治療してすっきりしたい、と母親に訴えて来院するお子さんもいます。

障害のあるお子さんの病院嫌いを完全になくすことは難しいと思いますが、少しでも病院が好きになって、抵抗なく診察や治療ができるように、日常診療で私が考えているアイデアを紹介します。

私が、生後間もない新生児から大人まで、ダウン症、自閉症、発達障害、難聴の方々、生活実習所・福祉作業所の成人の知的障害者・重度身体障害者の方々の診療を日々行っている中で学んだことです。

①病院に行く前に子どもに言ってほしい事

- ・何のためにどこの病院に行って何をするのかを伝える
 - －お耳にバイキンマンがいて耳鼻科できれいにしてもらおうね！
- ・子どもがヤダとかどうしてと質問したら
 - －「そのままですとお耳が痛くなったりするのよ。あなたはいい子だからきっとできるわ。きちんとできたらお母さんはとても嬉しい。応援しているからね」などの声掛けが大切。
 - *子どもの質問に答えて不安を取り除き安心感を与える。
 - *「いい子にできないと注射される」など絶対に子どもを脅かさない。
 - *「痛くされる」などマイナスの悪いイメージは絶対言わない。
 - 気持ちいい、すっきりする、など良いイメージを言う
 - *「あなたができるとお母さんは嬉しい」と、母親の気持ちを伝えると良い。
 - *「頑張れる」「出来る」と子どもの自信とやる気を育てる
 - *「帰りにアイス食べよう」などご褒美も毎回では大変ですが効果あり。

②病院、診察室の中で

- ・最初がとても大切なので無理をしない。どうしても病院に入れない子は外で対応したり次の機会にする。最初に痛かったり、嫌な思いをしたりすると病院が嫌いになるので初めが肝心。
- ・「耳の中など細かい処置で、危ないから抑えるね」と子どもに声掛けして、子どもの足をお母さんの足で抑え、子どもの体をお母さんの手で押さえる。頭は、声掛けをして看護師さんが抑えます。子どもが動く処置が難しく危険なことがあるので、かわいそうだと思うずに、傷がついては大変ですから理解が必要です。
- ・私が心掛けていることは、まず子どもと話す。声掛けをする。
 - －「こんにちは、何歳？何組さん？好きなお友達の名前は？」など
 - *子どもをたくさん褒める。かわいい、かっこいい、えらい、ステキなど。
 - 治療が出来たらもっと褒める。
 - *怖くない、気持ちいい、痛くても我慢しなさいなど、真実ではないことやマイナスの悪い事は言わない
 - *診察がきちんとできると自分に自信がついて、褒めるととても得意げで、次回もっと上手に出来るようになる。

障害のある子ども達と保護者が安心して病院で治療を受けられ夢と希望をもって自分らしく暮らせる社会をめざし、教育、福祉と更なる連携を深めて活動してまいりたいと思います。ご指導、ご鞭撻のほどどうぞよろしくお願い申し上げます。

中村:医師として人間として幅広い教養をもった感性豊かなお人柄がしみ出るお話をうかがうことができました。ありがとうございました。

スマートキッズでは、今年の世界自閉症啓発デーも、子どもたちが社会に参画し、素晴らしい力を発揮して輝く、そのような企画を1年かけてじっくり進めています。

世界自閉症啓発デーのシンボルカラー、青は、「癒し・希望・平穏」を表しています。だれもが幸せに暮らすことができる社会づくりを、これからも、読者の皆様と共に目指していきたいと思ひます。

<プロフィール>

北川医院院長、豊島区学校保健会理事 猪狩和子

1976年、北里大学医学部卒業、慶應義塾大学医学部、済生会中央病院、横浜市立市民病院耳鼻咽喉科を経て現在に至る。東京都医師会次世代医師育成委員会アドバイザー、日本医師会女性医師支援委員会委員、日本医師会女性医師バンク東日本センターアドバイザーを歴任。

東京都医師会代議員、日本耳鼻咽喉科学会専門医、産業医、都立大塚病院耳鼻咽喉科非常勤、小・中・高等学校医、保育園医、駒込福祉作業所健診医、豊島区衛生管理医師